

公開シンポジウム「大学で学ぶ文化人類学:フィールドワーク教育の試みと可能性」

亀井伸孝(愛知県立大学外国語学部国際関係学科)

2014年7月26日(土)、ウインクあいちにて、公開シンポジウム「大学で学ぶ文化人類学:フィールドワーク教育の試みと可能性」が開催された。日本文化人類学会が主催する行事を、愛知県立大学地域連携センターが共催し、多くの本学学生たちの協力、参加とともにこの行事を盛大に開催することができた。

本学でのフィールドワーク教育の取り組みの成果を公開する機会となったとともに、今後のPBL教育の振興などへともつなげることができる、有意義な議論ができた。

1. 事業の概要

【事業名称】

公開シンポジウム「大学で学ぶ文化人類学:フィールドワーク教育の試みと可能性」

主催 日本文化人類学会(担当理事:亀井伸孝(愛知県立大学外国語学部))

共催 愛知県立大学地域連携センター、中部人類学談話会

【開催日時・場所】

2014年7月26日(土) 13:30-16:55、ウインクあいち

愛知県産業労働センターウインクあいち 10階 大会議室 1001(名古屋市中村区名駅)

【予算】

計 35万円

日本文化人類学会より 30万円

愛知県立大学地域連携センターより 5万円

【参加状況】

参加人数:約120人(関東、中部、北陸、近畿、四国、九州の各地から来場)

参加者の属性:大学教員、大学職員、研究者、大学院生、学部生、一般社会人、中学高校の教員。また、

回答には含まれていなかったが、高校生たちと思われる若い世代の人たちが複数含まれていた。

本学の当日スタッフ:教員1名(亀井伸孝)、外国語学部学生10名(国際関係学科6名、ドイツ語圏専攻2名、フランス語圏専攻1名、英米学科1名)

2. 開催の様子

大学におけるフィールドワーク教育のテーマは、大いに関心を集め、熱気あふれる会場となった(写真および感想参照)。質疑応答の時間を節約するために質問票を配布し、来場者が記入して質問できるようにした。推定100枚ほどの質問票が会場から寄せられた。

会場では、愛知県立大学におけるフィールドワーク教育の実践事例紹介を兼ねて、国際関係学科の「旅の写真展」を同時開催した。休憩時間に、学生たちの写真作品を鑑賞する人びとの姿があった。

公開行事という趣旨に鑑みて、手話通訳を配置した。名身連聴覚言語障害者情報文化センターから 3 名×4 時間の手話通訳者の派遣を受け、経費は計 30,000 円+交通費実費であった（日本文化人類学会の会計から支出）。県下の全高校に案内状を送る際に、県立ろう学校も含めて送った立場上、バリアフリー対策は必要であると判断した。結果として、ろう者 5 人が参加した。「情報保障をありがとうございました」「手話通訳付の企画があれば参加したい」といった反響があり、公開行事における潜在的なニーズがあることが明らかになった。

3. 達成と課題

文化人類学およびフィールドワークが中等・高等教育において果たしうる役割を、多くの市民と共有することができた。学会の取り組み、本学を含む各大学の教育の実践事例を広く紹介することに成功した。

この行事を通じて、フィールドワークを教育に取り入れることに、多くの大学や中学高校の教職員たちが関心を寄せていることが分かった。全国各地の大学における PBL 教育の普及に伴い、このような傾向は今後とも続くものと思われる。今後のテーマ設定や開催形態、関心層の想定の参考となった。

各発表者とコメンテータが豊富な素材をもっていたため、それぞれが濃密な議論になり、来場者の満足度はきわめて高かった。一方、時間が押してしまった結果、総合討論の時間を大幅に割愛せざるをえず、このことを惜しむ感想が寄せられた。

171 名収容可能の大会議室を用いたが、120 人の来場を得たため、当初の予想よりも後ろの席まで用いる必要が生じた。このため、一部来場者からは「スクリーンが小さくてスライドが見にくかった」という意見が寄せられた。スクリーンを複数用いるなどの工夫が可能であるかもしれない。

一部の発表者が、日本語字幕のない映像作品を用いることを希望し、直前に発表者が文字起こしをして、原稿をろう者と手話通訳者に提供した（著作権の関係から、原稿を貸与した上で、終了後に回収）。行事で映像や音声、音楽を活用する際のバリアフリーについては、今後とも課題となるであろう。

本学を含め、大学において PBL 教育の振興が期待される今日、このような行事の成果をさまざまな教育実践のアイデアにつなげていくことが期待される。

4. 提出された感想など（抜粋）

【関東、大学院生】学びに直結したフィールドワークの事例がうかがえて、率直におもしろかったです。

【中部、社会人】手話通訳付の企画（文化人類）があれば参加したい。

【中部、大学教員】フィールドワークのおもしろさを再認識させていただきました。

【中部、大学職員】それぞれの先生がたのご経験をもとにされたご発表で、非常に興味深く拝聴しました。

【関東、大学院生】聞き書き、写真、映像を用いた調査のお話をうかがい、大変参考になりました。

【関東、大学教員】学生をどう外向きにしてゆくか、というのが目下の課題ですので、関心があります。

【関東、学校教員】情報保障をありがとうございました。大変よい機会となりました。

【関東、大学、中学校などにおける非常勤講師】ダイナミックな試みに多数触れることができよかったです。中高生向けにどんなフィールドワーク教育の可能性があるかを考えたいです。

【中部、大学院生】先生がたの語り方がおもしろく、楽しい時間となりました。

【九州、大学教員】続編よろしくお願ひします。

【中部、大学教員】ワークショップのような体験型のイベントなど、希望します。

【北陸、大学教員】もっと総合討論する時間があったら、よかったです。

【近畿、大学教員】私自身も PBL 科目を担当しており、いろいろ示唆をいただきました。

【北陸、大学教員】[今後、どのような企画があるとよいか] 人類学の教員のための映像人類学ワークショップ的なもの。

以上

【写真】

写真1 会場全景



写真2 主催者あいさつ (日本文化人類学会総務理事)



写真3 パネリストの発表



写真4 総合討論



写真5 愛知県立大学国際関係学科「旅の写真展」

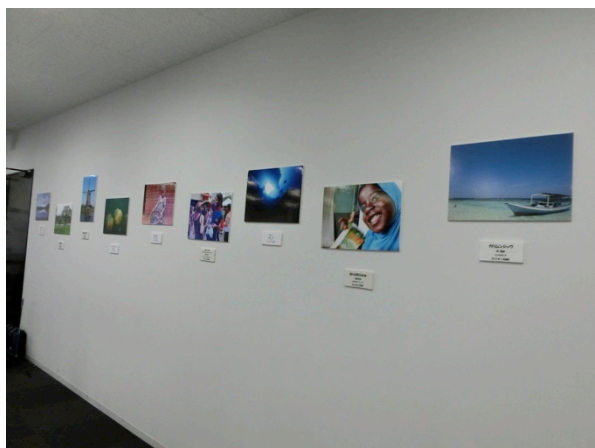


写真6 愛知県立大学国際関係学科「旅の写真展」



【資料】プログラム

シンポジウム「大学で学ぶ文化人類学：フィールドワーク教育の試みと可能性」

本シンポジウムは、「学生が自ら現地調査する」ことに重きを置いた教育実践事例を紹介することで、大学での文化人類学教育の魅力を示すことを目的とします。学生たちとともにフィールドへ出かけ、さまざまな方法を組み合わせながら調査と成果公開、社会への還元に取り組んでいる事例をもとに、文化人類学教育のこれからについて考えます。

あいさつ 真島一郎（日本文化人類学会総務理事）

あいさつ 後藤明（中部人類学談話会会長）

趣旨説明 亀井伸孝

「大学で学ぶ文化人類学：フィールドワーク教育の試みと可能性」

赤嶺淳（一橋大学大学院社会学研究科）

「学生とともに聞き書きをする：インタビューと記録の技法」

亀井伸孝（愛知県立大学外国語学部国際関係学科）

「学生とともに写真展をする：野外撮影の技法と公開の姿勢」

南出和余（桃山学院大学国際教養学部国際教養学科）

「学生とともに映像作品を作る：映像人類学の技法と新たな表現発信」

内藤直樹（徳島大学総合科学部社会創生学科）

「学生とともに地域に暮らす：調査実習と地域への成果還元」

竹川大介（北九州市立大学文学部人間関係学科）

「学生とともに店を出す：市場からまなぶ人づきあい」

松田凡（京都文教大学総合社会学部）

「学生とともにエチオピアを訪ねる：海外調査実習と国際協力」

コメント 和崎春日（中部大学国際関係学部・民族資料博物館）

総合討論「文化人類学の未来とフィールドワーク教育」

司会・コーディネータ： 亀井伸孝

- ・ 公開で開催されます。どなたでも自由にご参加ください。
- ・ 事前申込は要りません。当日会場に直接お越しください。参加無料。
- ・ 手話通訳の準備があります。事前のお申し込みは不要です。

連絡先・お問い合わせ：

亀井伸孝（日本文化人類学会公開シンポジウム担当理事／愛知県立大学）

〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻間 1522-3 愛知県立大学外国語学部 亀井研究室内

E-mail: nobutaka.kamei [a] gmail.com

URL: http://www.jasca.org/public_lecture/frame.html